

KODAK
LICENSED PRODUCT

M

Y

C

KODAK Gray Scale



歷世女裝考

春

櫛鏡共七

76
3102
1



此の書は終の事を見却上代の素摺りの中
 なる事と云ふ事今此終事よるもの事と
 様と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 牙の如く端控も来と云ふ事と云ふ事
 と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 此の書は終の事を見却上代の素摺りの中
 なる事と云ふ事今此終事よるもの事と
 様と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 牙の如く端控も来と云ふ事と云ふ事
 と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 此の書は終の事を見却上代の素摺りの中
 なる事と云ふ事今此終事よるもの事と
 様と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 牙の如く端控も来と云ふ事と云ふ事
 と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

此の書は終の事を見却上代の素摺りの中
 なる事と云ふ事今此終事よるもの事と
 様と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 牙の如く端控も来と云ふ事と云ふ事
 と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 此の書は終の事を見却上代の素摺りの中
 なる事と云ふ事今此終事よるもの事と
 様と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 牙の如く端控も来と云ふ事と云ふ事
 と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

弘化四年丁未三月
 菅原信光

歴世女装考附言

今弘化四年丁未より廿九年前文政二年己卯の春友人北川真顔翁
より彩色の古画ある女の圖の掛軸をりせりて書翰ふ此繪は鏡を
たのまきほきと遊女あるや常あみの女あり見せりて筆を下
がし説をききせよといひむをりたり其繪をいけるふ今ふ比がれ
此繪は衣服をとも甚異なり下圖を筆むいのかぞあやけるるる目な
新よあり其圖の寛永間の湯女ありけり其考証を記し圖の摸
そのかへぬるに圖はむいひくもやう近古の比及まら女装の今と異る
夏かくの如く猶むいふ進ひ遊ばりつらあんとそのち古圖ふ遇はる
ら臨し古唇を涉獵に其さぬの考証をきりけりふ遂に廿四九葉
そのの著述め物ありぬる一日年来ありて医師来りて謂るやう

或御許の御女今年十三とて鉄將初あまりふ其の母御余よ
地かせけり足下の京山ふありて女は鉄將つけりたりや
の事と又ふゆらりの始まるる京山よたづのまよのあやせあり
いあやとりひけるふ名をきりあひるは尋ゆありちもあやせを遠く
和名抄をとりめやう近く室町殿間の物ふきりし書抄てけり上
けるふ是もま著述め物ありける因てあひるは韃靼以来海内は湯
平ある事二百有余年萬民逸樂し文運もま日を過て盛るれば焦
篇雄作も陸統上梓て百逞備らるる然るふ獨り女装の沿革を
高權て古の質樸を奉て時維の侈靡を省棄せありひの容飾具其
物其事の起原など古書に徴て研究する書なけりむのそは漢字を
が其書を綴る世教の萬一ふもあらんやとあひりてまら女装

考と云ふ書名を儲けの文政五年にありける今より廿三年斯てのちの事は
 用ありし書成操りて女装の係るを必撮抄りて紙假の女装考
 料抄と名付し物今既ふ廿五卷ありぬ半紙十一行 卷廿葉前後然れども年々少く
 草子の作を書肆等ふ色を随て編まれバ随て需め督促て他の操筆は
 いらざるにまゝ女装の料材を空しく積貯せしめおのれは今年
 古稀のら九つを重算ぬまふかくて骨も料材と俱に朽るんとて
 かのころありたりしハ拋棄せらる此書を綴るふいさきり蓋おのれ
 始ハ七八百年許の中昔を限りとあるほど太古の女装の追述ゆゑ
 書名は歴世の二字を加ふ

○吾が寡陋の積置たる料材をまゝ書と為しつゝ考証の引拠尚
 ありしとて俄は是れをわきの唇を搜索んとするふ寒家書よとて

藏しも三度の類火ふ過半にありしゆゑ藏ざる書ハ字友は備ありひ
 西土の書の稀ある物の轉借して返すを期し迫る燈下ふ披て鶏をど
 ろつされしもたびくありし○さて頂日一婢を買し南總の漁者の
 女とまきて漁獵の事など尋問し詳も答むるありもあれ海濱に孫ま
 話の多たやと強てたぐひけまはまづ涙かたやりのみやう妻が祖翁年
 老るゆゑ漁のあらざるうらふ魚は藍を造るを手業とてけり去年三月
 節供の日自ら造たる藍を提て近隣の見曹と俱に潮干の貝を拾ひふ
 かけるふ其所得ハ蓼螺・拳螺・沙螺・比目の類あり遠く進み歩み随て得
 ゆる年老の慾ふつきまみ一ツも多く拾ひんとて見曹とわらわらど
 て帰りし祖翁はうらむをさるるふ悪風俄に起り潮水まぎらふ至りしゆゑ
 船をゆてちがさぬ助んとまきとぞも節供の遊びふゆて男ハ一人も家ふ

なうむを遂ふぢさぬ魚の餌とありぬ慈をわさるむよは程小貝をむらひ
て児輩とこの小婦らぐとて母も歎いぬと法然は語さう母のきあられ
まて按を拍て顧く吾があの著述も考証多うんを貪りて筆の余を
短たをひまらうのかの老夫が潮干の貝を拾ひてあやと發明して群藉の
涉獵を茲ふやあ学の淺瀨み筆を濡しつさまび文の海ふむらひのじ
ぬる文具もあまらあましく或ハ澳の玉藻のやうな儀ふようたる儀とて
其原をあらむを殊とてむらひもあやまらう○其もく此書の全
部らうさく假字を下あひの引る漢文の物の文多々假字をまへ
て読下の文ふあ少く指摘たるのさむかきをつけあひの事と解は先
下ふ俗言を用ふるを總て書物と疎き女兒倚りも読易く通曉やま
きやうふさくれば所為あり陋作争う識者の現を俟ん○中古の女

装の當時の物語昏ごの甚多し實記の論あけまど竹取源氏らるるの
作り物語の確証ありあがたふ似られども其のさゆれ人其世の風俗を
らゆりたるものさまび証拠とま○書を統て抄録せし時筆は剛よ
ゆびひて巻次をかたわらせりもあまを引用臨て再本書み扱べられ
ど其書もふ遠くて其のさふゆれもあり○近き世に女装忌は詳ふ
觸んとおの心事の棄てあるさうもあや○抑も其女装の書よこ
ゆり事ハ同くして緒書は散見し物ハ異むと類証のあはれあり
其さうもそのさびかの考料抄めらうゆりあはれまど書とあまらめら
引証の多端いらむふらさく且ハ紙葉の多を駄ひ省たる事いと多し
○檢証の古圖もあまらうゆりあはれまど詮用の圖のみをかせり
蓋し新圖を載らるる兒女の眠を驅る○此書全部の昏體和漢雅

俗の言辭を混淆て俗より人鴉文章ありあつたのを淺學ありゆゑありあつたの
 ありむ杜撰の説管見の弁鳴呼大方の笑をいひせん

弘化四年丁未二月廿五日

江戸 岩瀬百樹



○寛永中湯女繪縮圖

此圖の事ハ附言ハシテ

真顔翁が問ハ

答云

古画一覽

のこゝにひらきま

眼下ハ地女

あつた遊女あつたその着別



▲絵より極彩を帯ハのぐきも糸組とつて
 所謂▲名護屋帯なり

▲女のかつた竹まきさるハ古圖

▲地わさだりやう・あわ・帯・あわと朱一段づつ
 あつたつた此人物ハ地女あつた

わらわがていども人物の風を考へハ時代の寛永中婦人ハ其比の湯女あつた然れりハ
 垂髪ハし女ハ小袖の模様ハ丸の内ハ林の篆字とあつたさるハ湯女と髪あつたハ女も古く

唱ハのあかハあつた

訓沐の字ハ模様

あつた是ハ髪



▲小袖ハのこつが丸りやう朱・かひあつた
 糸目金・の・たひ紫

▲地わさだ・揚金下・帯ハの葉朱
 ・かひ朱糸目・金・の・たひ白
 ・扇金地・わね朱

わらわ女と人ハ

曉と絵師の機轉

こゝにえハ蓋又寛永の

比丸尽ハのりやうさるハ事ハ昏見多ハゆゑ其比及の髪洗ハ女ハかつたりやうの物着たつた人も
 あつたつたびのぐき湯女とつたあつたつた湯女の事ハ寛永十八年板・持をる物持ハ湯女といひつた
 めける女ども廿人並居ハ風呂ハ入りつた客のあつたをかし髪をどく其外ハ容色たつた心ハ
 わらわ女房ども湯ハ茶とて持持ならん世かたつたこゝにハ挑席ハあつた盛ハつた
 事ハ明暦万治の比の物もわらわこゝに依之給ふも流ハ事と存ハ

以上真顔ハの
 こゝに也

歴世女装考卷一目録・前編之部

- 一 鏡かみ始原そも 卅一
- 二 方鏡たうまき 四角しかくある鏡かみをいふ 卅一
- 三 柄鏡つゝまき 今いまは如ごとく柄え 〇神佛しんぶつみ鏡かみを奉納ほうなつする事 卅二
- 四 八やつ花形はながたの鏡かみ 〇鏡かみは異名いみな 卅六
- 五 唐たうはかみかみとのみ名義なごころ 〇鏡かみ鋭とろち 卅七
- 六 鶺鴒せせり鏡かみ 〇鶺鴒せせりのかみ 卅八
- 七 ちちりり鏡かみ磨と 卅九
- 八 松山鏡まつやまかみ 卅九
- 九 懐中鏡かいちゆうかみ 〇西土さいどは懐中鏡かいちゆうかみ 卅二

十 鏡かみを照てして面見めんけんえむ 卅二

十一 鏡かみ臺たいみ守まもを掛かる 〇椰やの葉は 〇鴛鴦うんおう羽うの事こと 卅三

十二 ちちりり鏡かみ臺たい 〇西土さいどの鏡かみ乃なり肇はつ 卅三

〇櫛くしの部

十三 櫛くしの權輿ごんご 〇擲ち櫛くしを忌い 〇湯津津たうしん間ま櫛くし考かう 卅五

十四 櫛くしみ扱あて神代かみよの人ひとは躰量たうりやうの考かう 卅八

十五 黄楊わうやうは櫛くし 〇沈ちん乃なり櫛くし 〇玉櫛たまぐし 卅九

通計附録共二十七條

歴世女装考卷一

江戸 岩瀬百樹 編撰

一 鏡の始原

おろす女中の燕脂鉛粉を顔に糝ふに敢て好色の為めはるるは是れ後
あり祝事ありさきばくせりあるありは女中の年若下も朝夕
假糝一ふふるは賤き市中の女も不幸あるは素顔を禮儀と或は
後家とありて厄ふるおゆるゆ名貴賤もけあやう成せざる成定例とせ
さきを假糝を祝事と素顔を不吉とせ是御国のみならず唐国共
古今の通儀ありさるる女とて屋敷ゆらゆらけけざる忌を
くけのけあやうする小第一の必用あり鏡ありゆあは鏡の女乃守り
とて女の魂ともいふ俗言はあらむ縁故ありゆありは鏡との人物は
日本開闢のときゆらあり物とて神代卷上を按ふ國常立尊乃

鏡ハガノ
魂とイヘル
4考澄

御子天鏡尊との御名あり鏡との人物あはるるを御名ゆ号ゆら

同書同卷

伊弉諾尊宙を御るは珠子生ん
とて左り乃御手白銅鏡を持ち則化出神有是を春灵尊と謂
右の御手白銅鏡を持ち則化出神有是と月弓尊と謂又迴首
顧眄之間則化神有是是を素戔鳴尊と謂也
弓のみとて是鏡との人物の因史ありとて始ありけり又鏡を作るといふ
海神あり
事の見えらる古事記
天照大御神也
弟命の須佐之男命勇猛
ゆらとて鏡の悪態をくやみあはる御姫の大御神畏あひて天石
やと
屋戸を閉てさしこのを坐られ世常常とありて万妖ありしゆあ八百
万神天安河原あ集り思金神も令思事計大御神をゆらたてまつらん
ため天字受賣命も可笑技をさせんと其御弊も用る種々の物を
造る中
古事記
本文記
曰科伊許理度賣命令作鏡とあり
古語拾遺
次次の度
鑄る其状美而

さて其時天香久山の賢樹を根と認めてかの石屋戸前小建て其中枝小
かの命が作りたる御鏡を掛する事日本紀 御鏡の形状大さきと古人の説あはれど鄙華より甚だ畏れ愛ふ事さげ
八咫御鏡の形状大さきと古人の説あはれど鄙華より甚だ畏れ愛ふ事さげ
此神鏡を天照大御神御身を離去あがら傳國の神宝とせさせ玉
ひひあや古事記 御天降段小御孫の瓊杵尊は八尺勾璫・鏡及草那
藝劍を授あひて為天下主あまるとあまの詔命ふ古事記 此之鏡者專
為我前御魂而如拜吾前伊都岐奉下畧とあり此事日本紀より小異あり
俗いといふところのみひひあやひひあはれはるるものちもひひあはれはるる
ものことあり天照御神の女神よを御座ゆゑ陰象の鏡を御魂とせさせ
あひあはれはるる此故實の本拠は鏡を女の鏡といひ守りともいひあり西土を
古鏡の可辟邪魅禳火災ともするより五雜俎卷十よりえたり右の如く鏡は
女のなまひひあはれはるる鏡は清浄よまはれおとし

清少納言が今弘化四年丁未より約八百年の枕の草子よりよゆげのてり調度

外 清少納言が今弘化四年丁未より約八百年の枕の草子よりよゆげのてり調度
さるものめで女のひひあはれはるるものねいなるみりこといへる八百年の
むらもたまはく鏡を磨かばけりいふふははて拭ひ硯の七々よのみ洗ふ
とわひひ黒もあがめをうへるとさる清少納言がころもあはれあや○さて清
の事どもを以て鏡の神代よりありしおあて女中の用具の中より第一尊むべき
物あるとあるは鏡の魔除にもあるおあて禁中より簾もも掛御船の
あひ一奉 榮花物語よりいへる○西土より鏡の始原の堯の時をためて鏡を
清くする事 事物紀原よりいへる○西土より鏡の始原の堯の時をためて鏡を
見を抄録おたがごとくある事の下りある成のみ取かつましくよわたのせの
○因云 北白瑣譚前編よりいへる尾張岡名古屋の入口前津といふ西の人より白翁と
いへる古鏡を蔵する内より神代の鏡もあはれ蠟思摺る成より六ツ見
あり云々とあり神代の鏡と鑑定するよりあはれられど其形状もいへ

藤房卿の
終焉之所

の御時不鏡をばつて奉りたる故實不極あり
今も神代巻に記されたるに
其の時賢本を根と認めしるを引くも若戸の附根と認め
其の本を若戸の前みたる吉事ありとづくあり
中昔 七八百 年の比及みゆりて
佛法盛ありし由名佛も鏡を供奉する交とありて
其の鏡を新し清て奉納する事とせんたり
更科日記 此書は後四位上菅原孝標がむすめ

柄鏡を新し清て奉納する事とせんたり
信濃国ふまの時以前縁行せし其の事どもを記し
さるるふまの國を通りし通事ありたる事どもを記し
さるるふまの國を通りし通事ありたる事どもを記し
さるるふまの國を通りし通事ありたる事どもを記し
孝標が女の作者ありし日記 けみ成奉納する如の文ふ
一尺の鏡をいさせ
えいつまのうせぬ中畧たるものうけみ成むるさげとあり
案ふ神代巻

たてまのふ柄を作ら建かく便利とありぬりたる柄鏡のふつり
一ツの話あり事長りれど好事の人の話柄とあり
○下野国都賀郡鹿沼の村長ふ山口四郎左門安良との人篤実ゆりて
学を好む人あり 前年押原推移録との入書成岡板と其の下の巻は万里

小路中納言藤房の遺器柄鏡の圖をゆりて作者の鏡ありて
要てあるま○「下野國都賀郡・西見野村長光寺の境内ふ山あり里人
長光山といふ山のふりて澤あり菊が沢といふ明和四年丁亥正月廿八日
長光山の裾霖雨の爲に崩しかの菊が沢より堀ありさるりの銅の塔高サ
内ふ觀世音を安置せし柄鏡一面を記す・古錢二十六品數九百七十六文

ありて
藤房卿あり世成道とゆひて此地に隠れありせし事ハ日之濱州やゆひ
草子ふえたり・抑此郷の後醍醐天皇ふはへく博学の賢相たりしゆ
天皇の御失徳を志し諫めしと不容ゆ道世しゆひて終る西と
まらざるより太平記・三楠実録もえたりとてかの長光寺ふちる玉田
村の境は不二菴前とのふあり 慶安二年の 菊が沢を掘りて鏡の陰は不二
行者とありふ符合されば藤房卿此地に隠れありし事明けし
以上推移録の
本文を摘要せ

○百樹案

日光驛程見聞雜記

先生作板本

鹿沼駅の条2件の藤房の

柄鏡の裏ありて推移録の説みあるト其の細註は「予が十四五歳乃て後

下總国亀有とのみありて是又瓶を振中ける内銅塔ありて観音の像

一体經文古鏡古鏡あり塔ハ高さ七八寸もありて経ハ一丈二尺あり

其の鏡ハ沙利塔の内ハ納めおけり古鏡も金にて銘ハ「整衣尉謹

瞻視」と陽文ハ鑄分たり藤房卿の物ありとて先考の許み持來りて示

者ありし外ハ藤房の心ありて慥なる証拠ありし事ありて先考の許み

ぬけありければ心をこめて見せし唯鏡の銘のみ氏覺居りあり大抵下野

中極ありし附と同一の物ありて誠ハ藤房卿土中埋りたるヲ火物人

間み現る事神佛の加護ありあり不思議ありし事あり藤房卿後ハ

京都妙心寺の二世授翁宗弼禪師と号す」とあり標蔭先生の云々

集古十種

鏡の圖ありて大坂商家吉田道可所藏とある其圖と其の押原推移録の

なる圖と同書より引く日蔭州ふものせしる圖とををさるふ大さも銘も

たがみ事なるし藤房卿父君の菩提の爲に作られたる鏡を蔵し

考下ふりしべし所の霊場ハ瘞むひ物のむろを五百年可

土中みま物今世より鏡三枚あり

あひもあつて然るのみハ一つの話あり○天保元年七月百樹季子

京水と後て豆州熱海の温泉ハ浴して廿日あり旅寢の徒然ハ熱海

温泉圖彙といふ物を江戸より作らざりし其の古跡をたのめし

同所の温泉寺ハ妙心寺といふ住職ハ縁起と叩くハ山を謂ふや此寺ハ

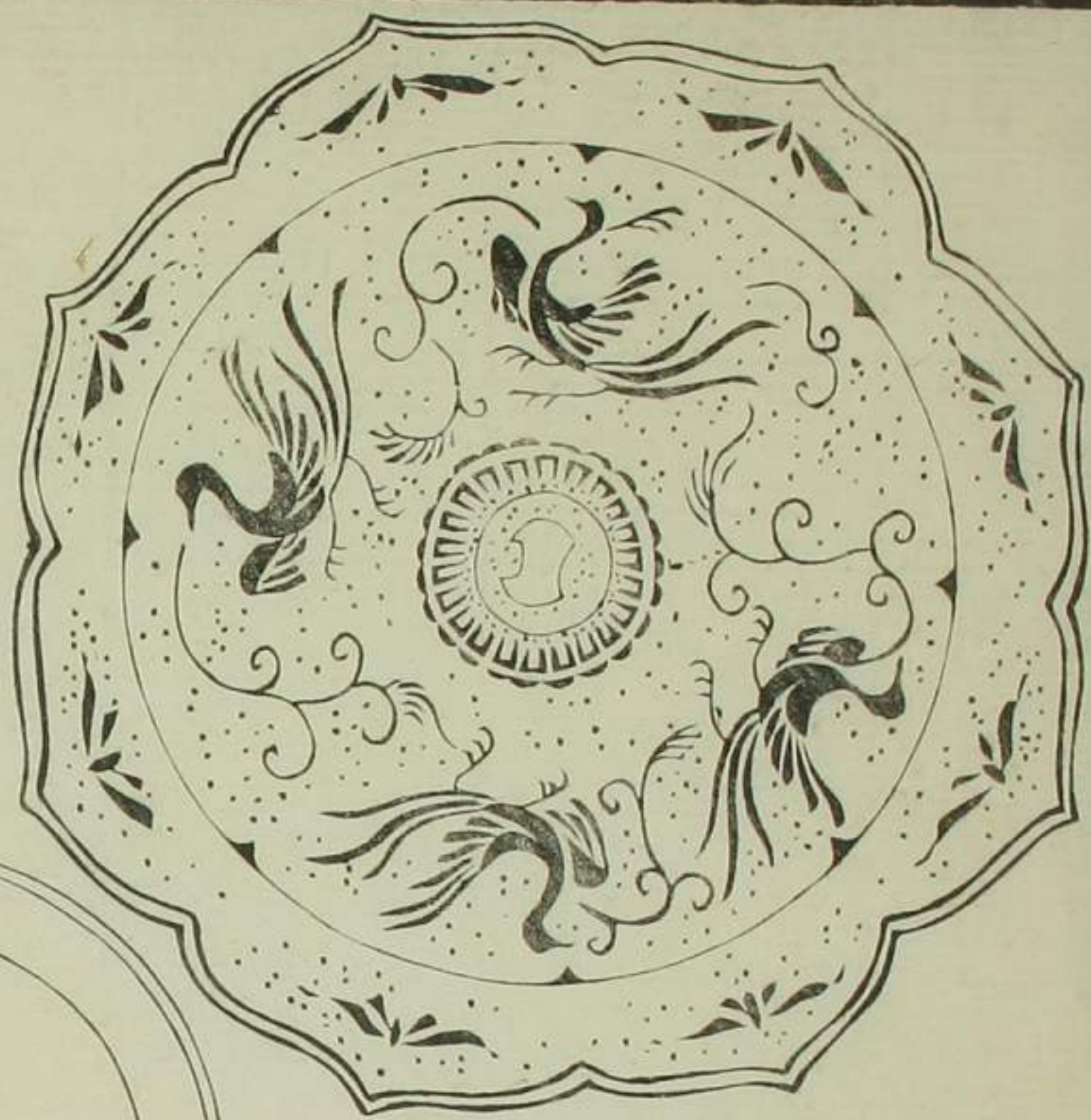
頼朝卿の建立ありて中興の祖ハ南朝の賢臣万里小路藤房ハ法名授翁

とて此寺の住職とすしふらより本山妙心寺の二世と登りしと語りしハ

師の遺物などありし辨せんとてひなればせざる物・禪師自画自讚乃

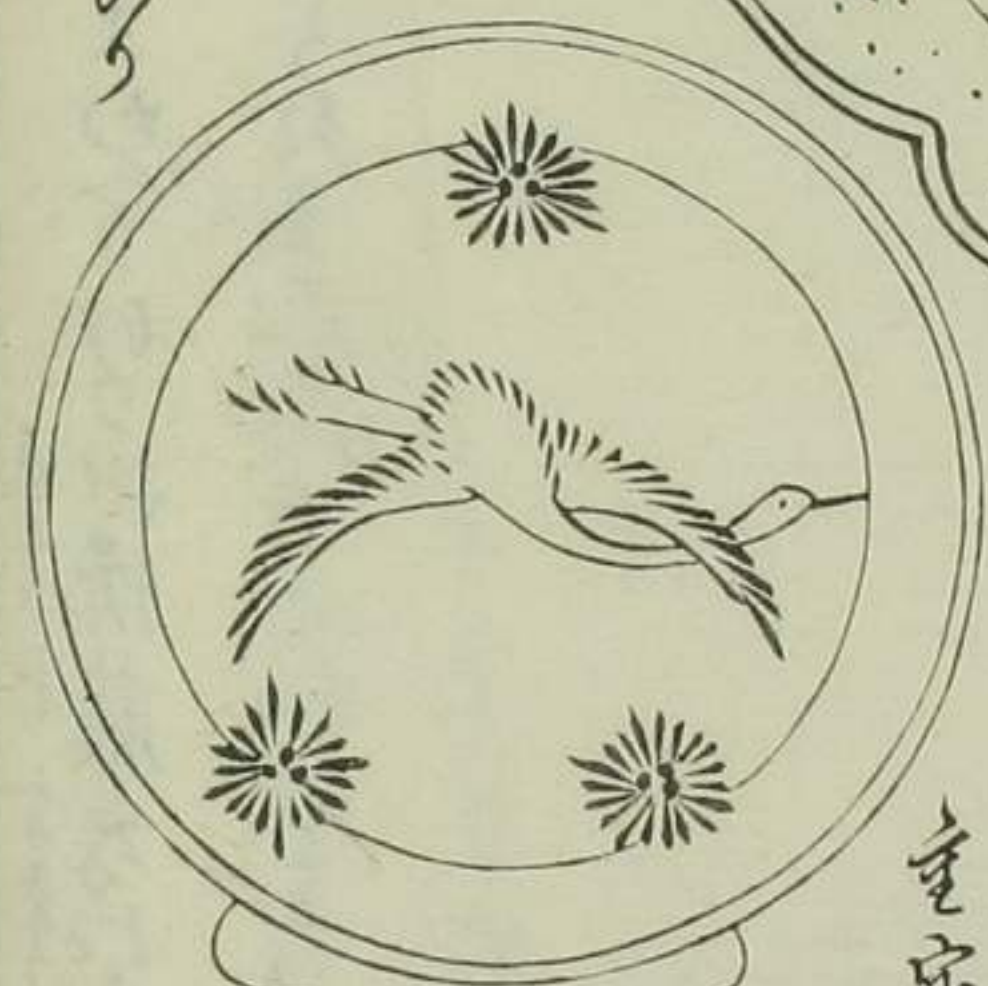
肖像・袈裟金・數珠唐物のをどもる事あり庭中禪師自植の松在ける古木の高浪あり一附枯たりとのちも同ドたる若木と植をえ
古木いたくとありとまきとひ さたの供養の為なまは此寺をどあのか
品を埋ありもあるべうと熱海ふ藤房の古跡ありといわのひよう
好事のありぬ○世もく藤房の遁世の南朝建武元年
北朝元年 時ふ歳三十九あり **太平記** 卷十三 藤房の遁世の事とり糸よ遁
弘二年 世の附の哥とて「世の世の人とて世の世の松とて人」件
よつる旧跡の事どの代わひの世を遁世のち西朝の乱を避ひて東
國は飛錫一あひ跡は雨く小鏡一あり半とをあらう **吉野拾遺** 卷一
刑部の義助朝臣越前國の粟山の城廓を構へけるよ山の案内とあるん
為山ふくこけ入りしよ松の茶もて昔月る庵ありまうとれば木の茶を集く
ひろとありある石のよは法華經をおけるのみろよ何もな一志を

ありて世をあらへたる傳のありよかうけり此僧藤房のきうけるふあびるひなれ
かの石よありありのもまうた世の人のとひるまはやくや雲よどりてあ
てん」とありてゆくへまはづりけるよあるせりされよ小國よもとてかこ
からまおえせよとえたり國よあたる藤房の鏡の面よ興國四年と
あり南朝の年号よて小朝の歷應二年ありけま今より 弘化 五百
余本以前もも柄付の鏡あり一成あるべ一蓋さしる日記あり柄付
鑄させく長谷の觀音へ奉納するかみとある藤房の父君のま
あししあひするかみをて換へ鑄させ持の眞福の為し觀音の像と
俱よ所へ埋ちありあり あつちの上の鏡を眞福の修養と
まろむの風儀あり **續拾遺和哥集** 馮本「公守朝臣母身はゆるく
のち朝夕をまける鏡よ梵字を書て修養一けりける道所よまらるてま
のわたり後徳大寺左大□はのりよつとける法印澄憲哥一世一人の影を



右八集古十種古銅部中山城
國大原古知谷阿弥陀寺藏
古銅の圖三十面之一

本書ふ大き圖の如くあり



ふいりわがみあり梅も今市中にて
ひさしふいりわがみあり唐物を撰
作りしめたるものも五十年前
以来の妙製とて今下輩百家の
重宝なり

和物柄鏡大き圖の如く
山東庵所藏

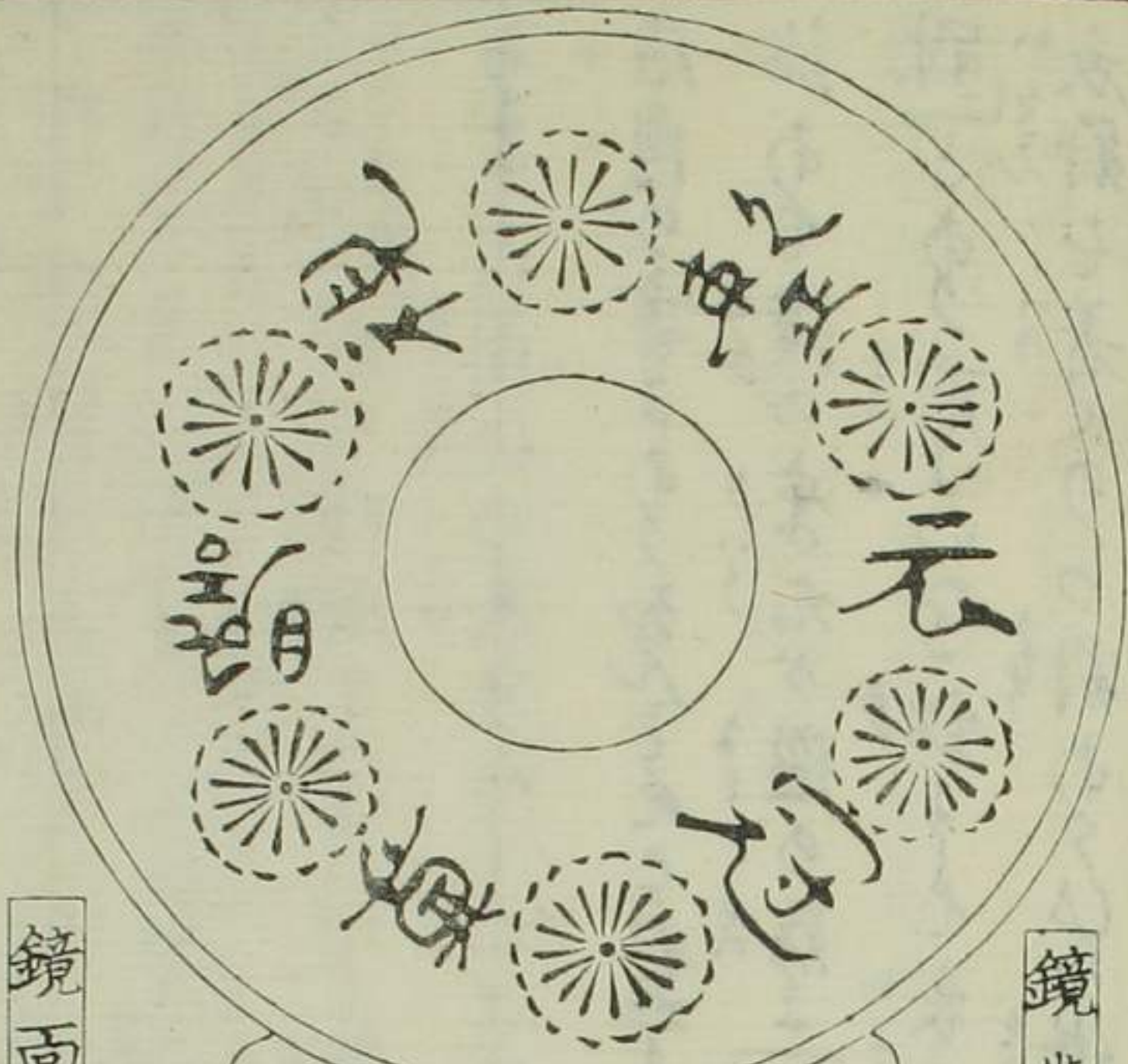
古を四五百年の物とて西
・拾遺集に伊勢が鏡の事を
て鏡の形を記し傳へていひ
るにわが相もあつた



山東庵所藏

○唐物硝子鏡

・たて二寸七分
・よこ一寸七分
金貨模
細工がみ硝子
絵やう形あげ
國の如く格好を
わがまが内り



鏡背

鏡面

右の押糸推推録卷下より見たる圖あり
此鏡の後醍醐天皇の御(玉)ひ藤原の
の遺器也其事実の本文を詳あり寸法
徑三寸八分・柄の長二寸八分・柄の幅上より五分
下より六分あり此鏡を極くする長光寺純教が圖なり

是等の外一覽ある徳家の所藏和漢
の古鏡を蔵する國中方鏡柄柄の
ひのわのまを飾する万治高尾がわらわ
るん鏡もどきとされどこれ余地あり

興國四年辛巳三月吉日

寶祚長久兼藤三位資通郷公
當塗王經一字三禮一品一錢千部

具福
藤従一位宜房郷公福壽
不二行者授翁敬白

ありし僅ふ百年以来の事あり古た柄は死の如きのみいふちひさし
これと髻鏡といひ圓鏡を鏡鏡といふ
寛文四年
板排書 佐夜中山集

「若き時持のりてやびんかみ附々伽羅乃油もかくし女房」
此頃ハ
髪ノ油

「洛葉集」
此頃ハ
髪ノ油

「周玄本朝のむい貴賤
とも髪ハ一糸一糸合せ流する事ありし」
西土ハ太古より髪を洗はれ

ゆひく其状の名さ人あまされば合せかみもあつらん
女才子昏
乾隆
十五

年板本朝 卷三小蓮といふ美人の傳は「小蓮性つき粧飾を愛自雲髻を
梳毎ふ就面双鏡を以て細照稍一絲有乱髪ハ必侍婢を呼て分理」とあり

西土の柄鏡ハ合せかみも七便利の名あり

四 ハツ花形の鏡・鏡の異名

鏡ハ菱の花を視て作りと作りとハ物といふ事西土の書ハ教見を即鏡乃

異名茂菱花といふ古菱・紫班・紫珍・鸞頭・百練・壽光・散文・白崎これ
みる鏡の異名あり菱花ハ即ハツ花形なり

社の什物の鏡ハ菱花の真鏡あり裏ふ文字あるとこれハ和鏡なり
攝州今宮乃
攝州今宮乃

奈良七代の頃といふと「その文字も圓もかたゆる」
元正天皇より五十二代桓武天皇の間あり

是千余年以上の古鏡ありその文字も圓もかたゆる
元正天皇より五十二代桓武天皇の間あり

けり西土の鏡譜といふ者ハハツ花形のも大小ありしとありんが若年の
鏡ハ

五 かみれかみ〇鏡餅

一条院の御世の間ある物倍倍ともよかのかみとの詞あり
異

「かみれかみのま」
異

とあり此比及ハ唐國の便と易うしゆ萬の調度大なる唐物を用ひ

ゆ名唐の鏡もせよわらじあるん今も神佛の什物よと其某の持ひ

鏡餅の起

とて入鏡おやうの唐物ありたりされど千奉以前の和鏡の唐物ははた
れやまき具眼ねに鑑定さうらふおと鏡の圖をさそふべし

○周々今の入鏡録との人物いと古くよりありし物あり **濱松中納言物語** 卷四

「餅鏡」とあり **源氏物語** 初音の西「あかきふむきおつたがふあ乃

いそひーてのちひかみとさくやうしやせくちとせのかけふあさそせうあ

いそひゆともて」又 **源仲正家集** 仲正の頼政の父より **元日恋** 千代もをぬ彩成あり

づく遠えんといふ鏡ののちひげうめや」用ひ解ふのひをけたり」彩成あり

「とあまを今よりあそむのどくかきぬもーあふもあつんのちひさ

餅の事形圓たう脈漬といひーを今のかみもちとの入正月かみもち

をかさういふ事八百年のむーも件のごとー又正月廿日かみもち

さて女中の従人の初顔いそふの心も東山殿比の管中れ女中のあそあしと

ありはたあさうのこあそあしたのいさるゆあうしふ今らんりちはたとれとえ

あそ物事自由なるま九尺或間をわのが家とまる夫婦さじののまうそ

へあさうて初春成いそふあうけた 淨代の國澤は浴するゆあさう此ッあそ

酒恩よふとくく鏡餅のゆ猶又引き書あねを食物沿革考よのあへ

六 鶴鏡・鶴の鏡 附鏡裏南天ヲ付スル

古鏡の阴は何ともあれざる鳥のがら成清対するお和のゆも涙のゆをあり

此鳥の鶴あり **神異經** 此書東方朔が作したる古鏡を打て清人姚際恒が

を和解を昔漢の夫婦あり支他國は行くと別く附妻のゆあしなり

ける鏡を破て二片とあり一片成懐あり一片と妻よのこて再會べたの伝と

を其妻人を通トけるふ夫がのこたる信の鏡の一片化して鶴とあり遠ふ飛

て其の前ふいさ再片鏡とあり夫乃知之これより後人固て鏡を濟るよ鶴と

鏡の脊よ為とあり流傳度き故事とえんく・調鑑類函 卷の三百八十 佩

文韻府 卷の八十二 格致鏡原 卷の五十二香 寫中もえんく又此故事とあり

ざらりて事まみりたるがみさきの事家兄の骨董集の中ありき

人倫訓蒙圖景 元録二 年板 かみさきの条に「鏡磨るべきかよれ志希里とりの水銀と

合せし砥の粉をまじり梅酢をそそぐ」とあり又「のちみよ竹 寫本全五卷 正徳二年壬

旅の霜月筆を石花菴の巻二「母のまゝみ我ガをまじりし寛永の頃いみ

ざくゆの汁をそそぐみさきの梅の酢を舟中みくことよせのう

らありし一ツありといふ事」さきほろくあり昌平の岡澤みはれて女由

假粧をたみ鏡もせよ多くありしや鏡磨るゆゑをさきと梅酢

よありさきさき一せし中のかさきも安居み鼓腹さきゆゑさき

世の中は鏡のまきさき一証抄のまきさきとよみさきさき

八 松山鏡

雑譬喻經の釋迦の時 卷の下はさき「昔の長者の子新に婦をむすべしとあり

時夫婦は語曰卿厨中み入りて蒲萄酒を取来れ共飲んと婦は鏡を

開き自身の影のうらむと見て謂更に女人ありて此鏡中みかきとわりの

還りて其夫よりみやり汝自婦人ありてかめの中み藏著るがう我と迎ふと大

小悲なれば夫いづく厨み入りかめ鏡にさき己が影を見て遂てその婦を

恚て絹汝こそかめの中み男を藏かくまれと夫婦相忿恚自呼為實のひ

あらしひ誼諱して不止時梵士来り毗丘尼も来り此変をさきかめ鏡をみ

持のかげらるる鏡にて伴りてけんらとさきとて去る時道人来り鏡を視て曰

我汝等が為に甕中人を當出とて大石取りてかめ鏡打壊なれば酒あられ

尽て物有とさき夫婦をみさきの影ありしと知定壞慚愧なり」とありさきの

事を一ツの語とて宝物集 此書は清和公の爲に後寛和とさきみ配流せられ 平判官康頼治承二年春帰洛の後作り物也 卷の

四ふ書さきを本抄とて作りさき鏡破の繪巻 宇支拵 園所藏 との人物あり 東山殿 項の物 持の

中よ都の四糸ある見世棚のまきさき百姓が鏡を買ふ所の紙巻の四條通

へいたるふ商人品々のうらむ物かきうらむるさきと鏡ハ其のころ態様あり

時のさるるに手近く鏡臺をどるべきやうに枕のわらふを懐中鏡の
ありけり後の物よとへる中玉六百余年前治養の頃の物写本建久二年六月の条よ
鼻紙の間小鏡をいきて持奉りてを徴とされば古き小鏡ハ懐中鏡
あるべし西土にも懐中鏡あり清人紀時作 金冊中箱本卷三「新婦拜神懐中
鏡忽隨地裂為二」とあり地小鏡て為二あるかみの薄き奉明一因
あり小豆硝子鏡也清朝を懐中する硝子鏡の圖前小出せり

十 鏡を照て面鏡見む

晋書殷仲文傳 小仲文誅せりる条の文小「仲文時照鏡不見其面數日
遇禍」とあり鏡を見て面鏡のうつらじしとありおみまふといふ如く鏡ハ
威ある物ゆゑ然る事もありけりゆのま若るし以母の法ある御館小は
間廢せたるかみを持ちまき蓋よいとあり小婢あやまると踏蹴とをまきどその
あはれをたれば黒く曇りてありゆゑにけりふふみとて婢月のさりり

みくあつと語まき此かみ今猶家あり陰ふ南天を清けりる常並の
物よと頗る美あり小似る且母の遺器とバ秘藏とをふかくかみり
心まべき物ぞ

十一 鏡臺小守を掛る・椰の葉・鴛鴦の羽

雅亮裝束抄 卷一 小鏡臺小守を掛る事見えり此書の作者雅亮朝臣ハ
治養の間の人あり山槐記さきバ今より六百余年のむく鏡小守りをか
るもかみり女の護身あるまあり鏡臺ハ椰の葉を鴛鴦の羽
あんてんの葉 ちどのつちも守り残るるをよて迎きむりよれば俗習あり
寛永十五年撰 椰の枯葉小守るまき見外出りみかひのうとささうと一 俳諧
正保元年板行 椰の枯葉小守るまき見外出りみかひのうとささうと一 俳諧
毛吹草 寛永 ちどのつちも守り残るるをよて迎きむりよれば俗習あり
享保 椰の葉小守るまき見外出りみかひのうとささうと一 俳諧
廿年 椰の葉小守るまき見外出りみかひのうとささうと一 俳諧
曇らぬ月の面影ハ椰の枯葉に名をとり小鏡の裏みおるらんるだかみよ

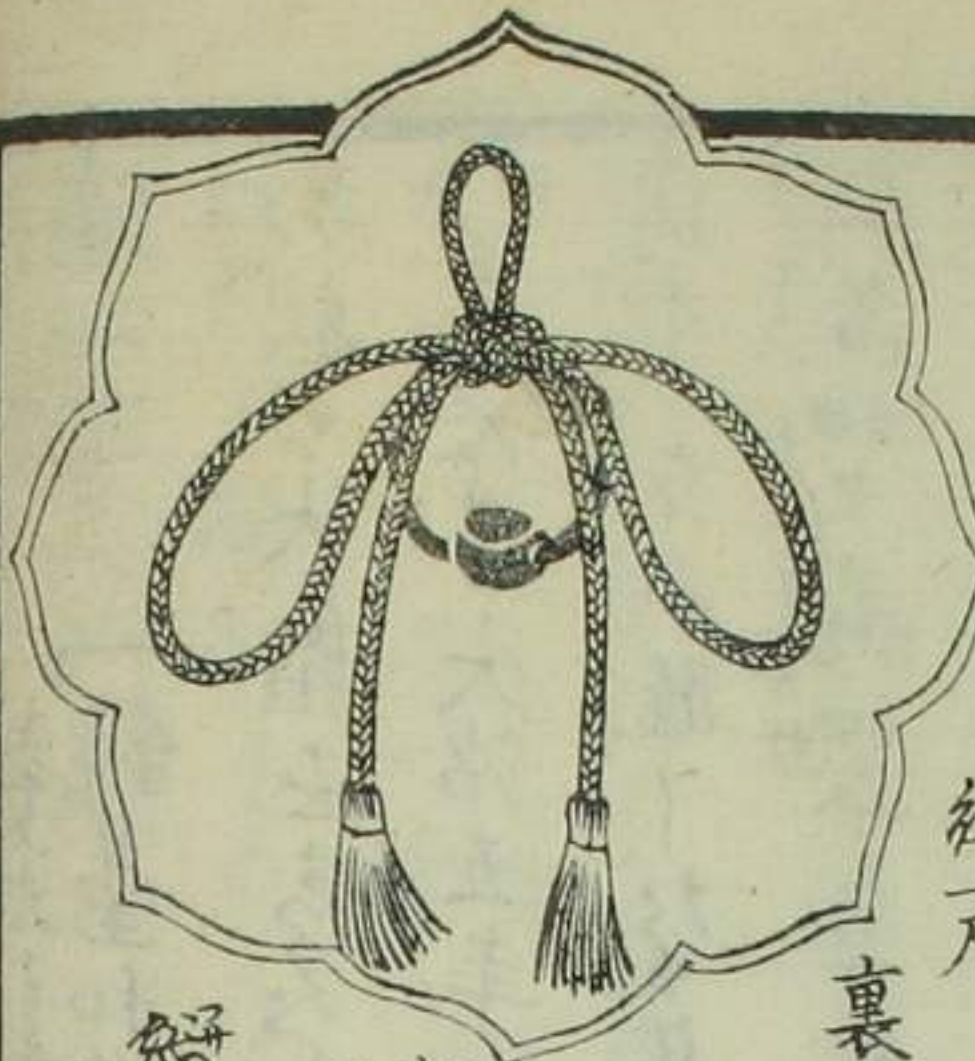
鏡臺之圖

熱く地
青真入り
為繪

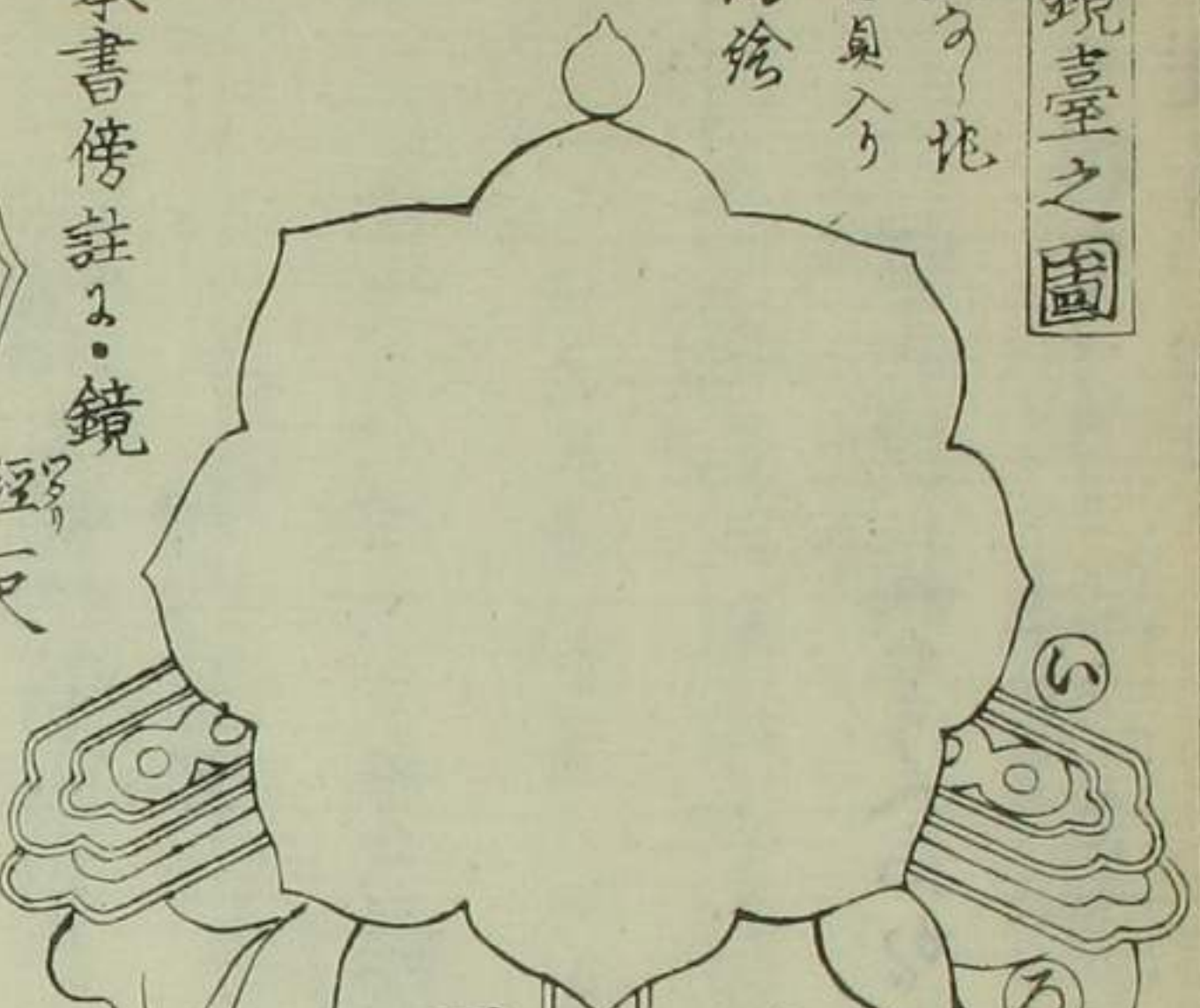
・本書傍註に・鏡

徑一尺

裏鴛鴦
唐艸



加その
緒長さ
五寸五分
三寸五分



類聚雜要卷四に此圖あり是の

今より七百十三年子

大治五年二月廿日

藤の聖子中宮より

后に立入の時の御調度の

一ツあり俗ふりかゝりたる具

あり(一)是の姿を組する物

羅經と云かそのひもを

むまじと云たる物なり

か(二)羅經とは此脚本書

か(三)脚を二重ふたれたるものなり

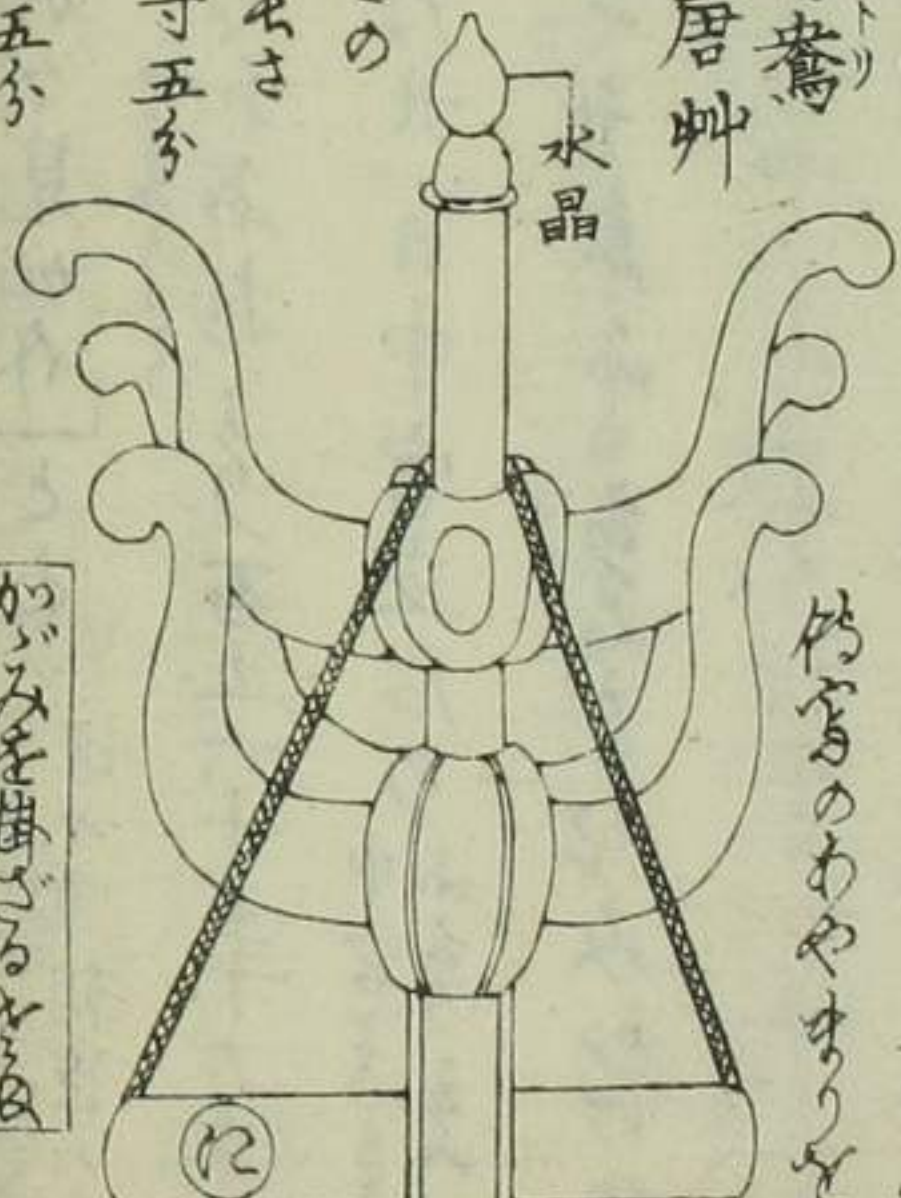
竹宮のわやちりと古くつゝゝゝゝ

(四)是の形常より鏡の枕

移すつゝもあり

按はわみの守りありて
鏡はゆりの杖の事古書
み所見多し形も筒なり

か(五)みを掛ぐるや



水晶

永祿年中の寫本
元服法式に此鏡臺の
圖あり

依てありのふきよき

たる大治年中の鏡臺

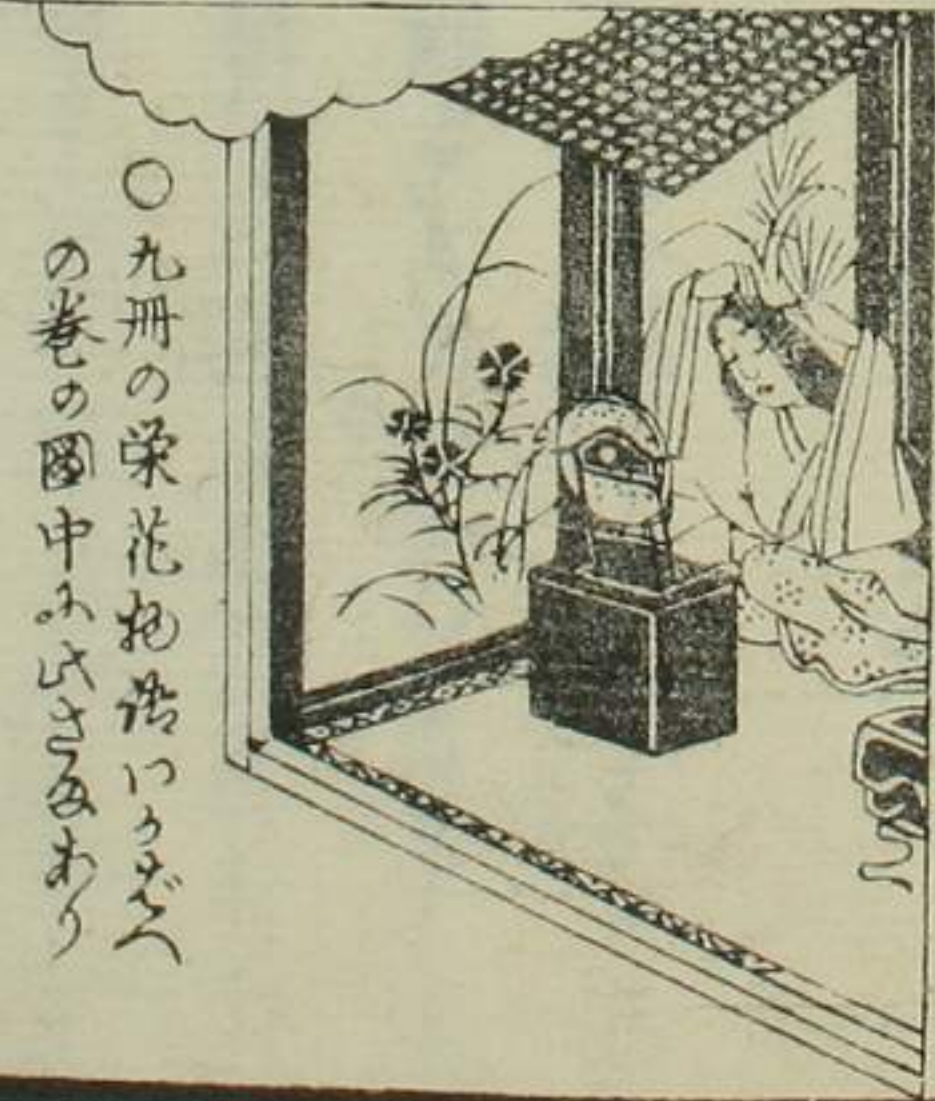
と形ありたるが大治より

四百余年の後に永祿の鏡

臺もかゝりありて此鏡

臺の如くありてあり

・此の右の図
これ略也



○九冊の采花物語の巻の
の巻の圖中ふいさゝあり

○元祿元年板

女用訓蒙圖彙

此圖あり

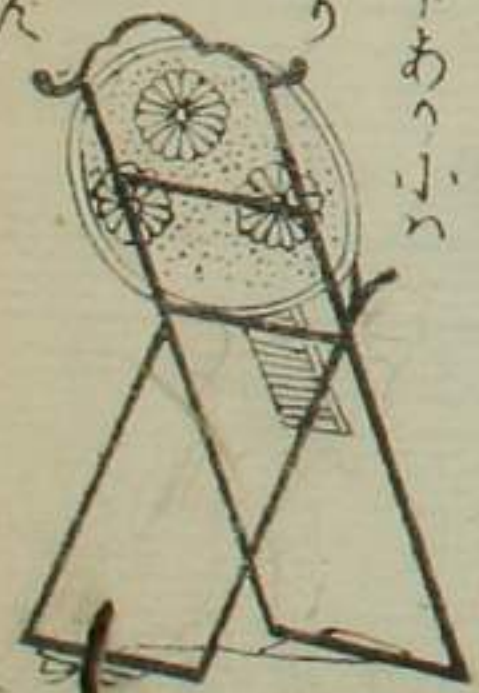
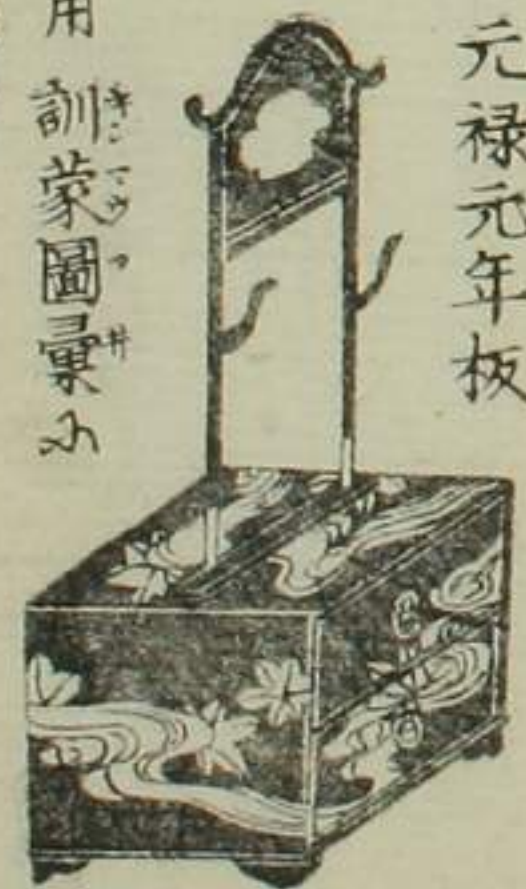
大の鏡臺あり

鏡架あり

此形百五十

余年來

今にあり



箱ハ二百年の以前よりあり物あり又むろくもたむも自在なるがみ
たてハ宝永七年板今より百三十八年まで誰ガ身上み川崎氏の妻の白と「燈」の
も亦ハ月の鏡」とあり○西土の鏡臺ハ事物紀原器用鏡の次ハ鏡臺
とありて魏の時宮中よりありたるものなり他の物中も見えなれど
これとてむろくも

○西土の鏡の起原

事物紀原八ハ今ふ玄中記を引て鏡ハ堯の臣尹壽作りとすむろくハ又黄帝
内傳を引く黄帝既王母と王屋今會して大鏡十二面を清て月今酒
ひたありて用也則鏡ハ黄帝今肇今堯の時とあり作りしありむろく
とありさむろく鏡ハ和漢ともハ太古よりありけるゆゑ其故事ゆいと多かれ
らむろくむろくしぬ

十三 櫛の始原・櫛櫛を忌縁・湯津津間櫛の考

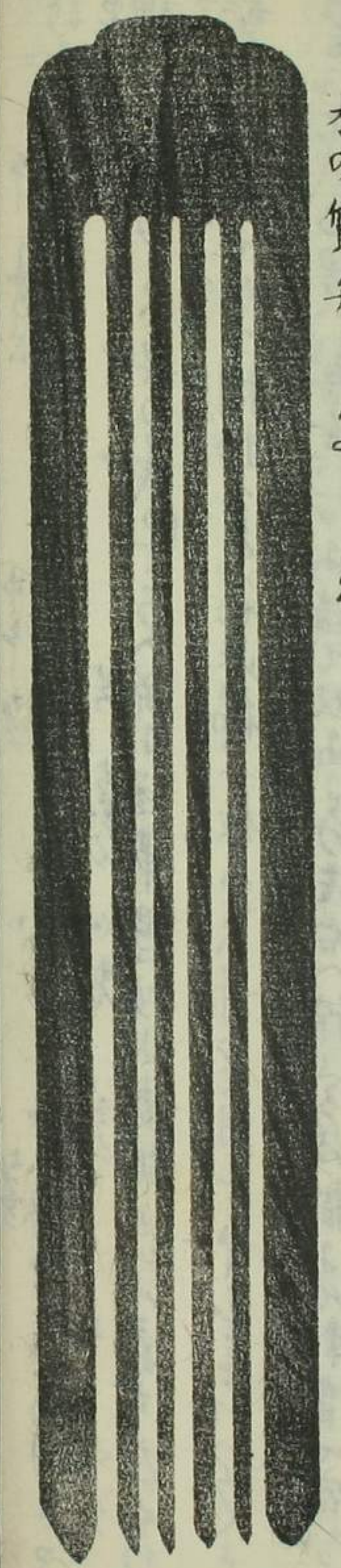
人あり髪あり髪あり櫛もありされバ櫛ハ鏡よりさる小あり物
とぞありむろく・神代今櫛の事日本紀ハ不見えハ伊邪那岐命伊邪那
美命神女と御合今て女神の御腹ハ御子三十五人産ありて按るハ多産ハ神通多
人理をのり推へる
遂ハ神避坐ありハ出雲国と伯伎国の埜比婆之山今葬今奉りしハ
いざるだの命御妻のいざるみの命を慕ひありて黄泉今至りありて御妻
の屍を視ありハ今櫛今左りの御髪ハ刺せありハ湯津津間櫛の男
柱今一箇取闕今一ッ火ハ燭今て女神の屍を細ハ視ありハ今還りありハ付
泉津醜女真土の鬼命を逃今かけハ命黒御鬘今を
投棄ありハ醜女生蒲子今とありハ今撫今食今の間ハ逃今行ありハ
猶又逃今ハ其右の御髪ハ刺せありハ湯津津間櫛を引闕今てありハ
ありハ生筆ありとありハ今枝食間ハ逃今行ありハ今支
ありハ今摘要今とありハ是ぞ櫛とハ人物の神典ハ今とあり始あり

湯津瓜櫛
作れると
作れると
リつること

けるまゝ伊邪那岐命より猶前世より櫛のありし物あり事明し○右の
黄泉殿にて命の刺せし櫛を投棄ありしを日本紀自註して曰今世
の人夜忌片火又夜忌擲櫛此其縁」とり斯註したる養老四年乃と死
あまふ今も擲櫛を忌事千二百二十余年前者の風儀あり櫛の人みぢるぬねと
○さて伴の黄泉殿に「湯津津間櫛」とあるを同書の八俣遠呂智乃
糸る湯津瓜櫛とあり本居大人が「古事記傳」に瓜櫛の瓜の櫛の齒
のまげく間の堅くせまきくはつ古の櫛の瓜の形ありとも妻櫛の
意ありともり誤ありといひ又櫛の本串と同ト名あり黄泉殿火を
燭しよみと思ふ上代の櫛の齒や長ろしる串と同類ぞうといひ又湯津
の清淨の義又木の名なごのいあさむむといひ又同卷あり天稚彦が雉
を射雨の湯津桂の解る湯津の五百箇あり枝の繁をいふといふこれより
以上此説み扱バ湯津津間瓜櫛といひ何れ作りたる質ありとせねど
摘要

湯津瓜櫛とせまきく今之櫛より長き物ありといふ解あり其もく本居大人を
博達のおのひと古事記傳よりめたる大家を其説みちのまが浅学の
齒口をりて間然まべたるありねど竊み謂く件の如くいふは命の櫛の
齒を火に燭しよみさののみあさむむ豊玉姫鸕鷀草不合尊を産みよと
御夫の火出見尊櫛を火に燃して視よみし事あり神代櫛の火に燃るは
ゆて本ある事論をまごせすゆ湯津桂といふ本もありしを神中抄に
或人云やの湯津桂の本ゆて作之はげの櫛の如くつまい妻の義」とあり
本居大人の此説を新撰字經より「柞の奈良の木又志比」とあり和名抄に「柞四
声字苑云柞和名由志漢語抄云波々曾木の名堪作梳也」とあり湯と
志といふ音近きゆ湯津の津を後年より由之といひけんは喜内藏寮
千年の天子の御櫛の事と「年中所造御梳三百六十枚中畧皆用由志木と
古書より此後さあすせその齒音ふらけうてゆすの本よりの
梁臺愚案抄

櫛長く大ききやうに、更推てまゝならんが大槩ハ心ふほりのやめを灼然とす
 証あるやあるかひもいづらひけるふ一日字友来りて物語のほひで櫛の姿をならし
 みのやうに前年西遊せし時南都の達識穂井田忠友翁の宅に
 櫛観古雜とて人物を視し中ふ一古寺の宝物とて神代の櫛を視て摸写するを一覽
 志く心ふほりまゝとすといふとまゝとすといふとまゝとすといふとまゝとすといふとまゝとす
 たる下ふまを此國成とればむすし櫛をかんざしといひいへるやうな髪とす
 まるた物ふあつむを因ておひふ神代ふも解梳ハ別ふ有けんか
 長さ九寸余幅二寸五分余木を作りたる物作りまら古朴多
 木の質糸トヤトヤとす



此國を視しを伊弉諾尊櫛の男柱をかたやうて火ふ燭しあひて伊弉册
 尊の死を照し視あひしも彦火の出現尊のうぐやふきあむのこ
 の生れあふ所を視あひしやうの同ありし櫛の大さめ実ふとをわりの
 又黄泉段のこころみ櫛を引くたぐらふちあふを生筆ありとわりの
 醜女が抜食しをあひつる櫛の形ち見ゆ
 祖しるあひつる神通しそそのま其物とありしあり

古事記み扱りにわりのやう櫛の歯ふ火を燭してかの屍を視あひ間
 ありし此櫛大ききうんたの櫛を刺し御頭も御身長も推て志
 らるおの種植ふさる草なる初生ハ花も果も大なるごとく国の岡
 間の人ハかゝるむ長大なるん天地自然の理ありめとわりのひみ果
 常陸風土記 此書ハ今より千百年前和同年中諸國 那賀郡の糸ふ岡あり
 大櫛と名づく上古人あり躰極長大丘壟み身居て蜃を操食中 畧其
 大人の踐跡長さ三十余歩廣廿四歩 本書 文とあり日本武尊ハ御身長
 一丈 古事記 御歳十六の時叔母御の小袖を備着して乙女の扮して他所へ

古事記 御歳十六の時叔母御の小袖を備着して乙女の扮して他所へ

行ふも支あり 同書小見也此支をささる 此をささるの身はさけりも推てささる

此尊の第二の皇子足仲彥命 仲哀 天皇 御身のたけ十丈又大常彥彦刺

呂和氣命法たけ一丈二尺脛四尺一寸 紀 無仁 又及正天皇法たけ九尺二寸脛齒

の長さ一寸二分 皇代 紀 さいふおひ比ぶれば伊井諾尊も冬出見尊もはたけ

一丈の余もあけけんじ さいふおひ比ぶれば伊井諾尊も冬出見尊もはたけ

中み独り少彦名命ハ 鷲鶴の羽を衣とあ 日本 書紀 上代あり樹あり百丈七十丈

ある大樹あり 日本 書紀 上代あり樹あり百丈七十丈

起世經 起世經 小見也釋迦如来身のたけ一丈六尺神農ハ八尺七寸黄帝ハ

九尺小逾孔子ハ九尺六寸 周尺を今尺小と 七尺六寸八分 書見を以て和漢の上古の

人の大さしをささる 又上古此人の大きか 証批の残り 新著聞集

雜事 阿州勝浦郡大原浦千代ガ九觀音堂修復の時長九尺八寸横四尺

余深さ二尺九寸の石櫃を掘出せり 関まこれハ骸骨一具あり頭の廻り

三尺七寸額より腮まで一尺七寸齒長一寸五分左りの奥齒より右の

奥齒まで一尺四寸外み劔二口あり 一口ハ長さ五尺五寸中三寸一口ハ六尺

八寸中二寸五分鋒の少一本長三尺中七寸矢根廿五本各長一尺二寸

元祿十五年 壬午四月廿四日の事あり 鳥居 此の物も 写本 全書

此支をささる 寸法時日さる此骨小肉有へささる大人さるん又新著

聞集 同 延宝三年 鎌倉深沢洪水 崩きこころ三尺さりの頭骨あり

これゆふ齒の長さ一寸八分 若宮小路の渡辺氏その齒一枚ありささる

ぐらりの本の所へ埋 又 諸国風土記 写本寛政十二年無為菴作 奥州義経腰掛

松の条 半田村百姓善右工門ガ地ふ古塚あり を享保二三年の頃

ゆ名ありて極崩 けるふ人の頭骨ありささる 三尺四寸上齒四十五枚

下齒二十六枚齒の長さ一寸四分 其齒一枚あり 家み残り ささる



京水筆
百層



地を掘てたゞも大人の枯骨を出

さうたる事かぐの如し又大内此宮女も本様はしるゆ清少納言が

枕のまじり季吟本の一はたぐい七日正月雪間のりなをやりみみりぞ出

中車畧車らるまじり見ふあつて御門ゆゆのみのとどろきみむたひ入りやど時

か頭らともゆとささるよ轉まらび合あひてき用くもあち意よういせねを折をれ

さど笑りりら又もま奥つわ具か笑くある宮女三四人も来たらん物見車を折

清門たてのたて相たてへのりかけがうと引ゆゆたたるたのふ女中たぶちた額たをうた

ありたけりたたるた櫛たのちたるたも心たげたるたをたふたまたまたたた折たきたるたをたさたじた

けたもたどた車たれた内たあたれたがた笑たひた須た保たもた又た一た具たありたとたありたさたうたがたもたちた

をたをたあたんたどたとたいたふた文た句たはたくた宮た女たもた本た様たさたたるたをたあたるたべた又た室た家たにた

とた同た時たありたふたよたるた信た實た朝た臣たがた作たのた今た物語た五た節たのた冬たのた夜た舞た姫たのた木た

揺た火たのたふたたたくた燃たたるた事たとたうたさたてた貴た重たのた沈た香たのた櫛た

もた何たをたりたりた榮た花たのた春たふたあたらたかた孫たのた箱たれたあたふたかたみたをたいたまたぢたんたりたんた

白たかた孫たのたかたうたぐたいたをたいたまたとたありた沈たのた櫛たとたいた事た○たさてた又た古た言たふた玉たとたいたつたのた

何たもたもたあたはたそのた物たをた美た称た辞たありた万た葉た四た卷た乙た女た子たがた玉た々たげたあるた玉た櫛たのた

いたうた今たもた妹たふたあたはたとたざたれたがた又た玉たのた飾たをた乃た玉た々たもたりた夫た木た抄た

櫛たのた心たをたばたあたやたあたはたるた白た露たのた玉たれた小た櫛た派たけたりたてたるたまたとたんた下たふた出たせたるた

政た子た清た前たのた櫛たのた形た状た此たふたふたうたくた似たたりた○た今たのたたたらたうたれたうたのた事た次たふたかたまた

鏡たのた女たのた魂たたらとた澄たをたれた下た

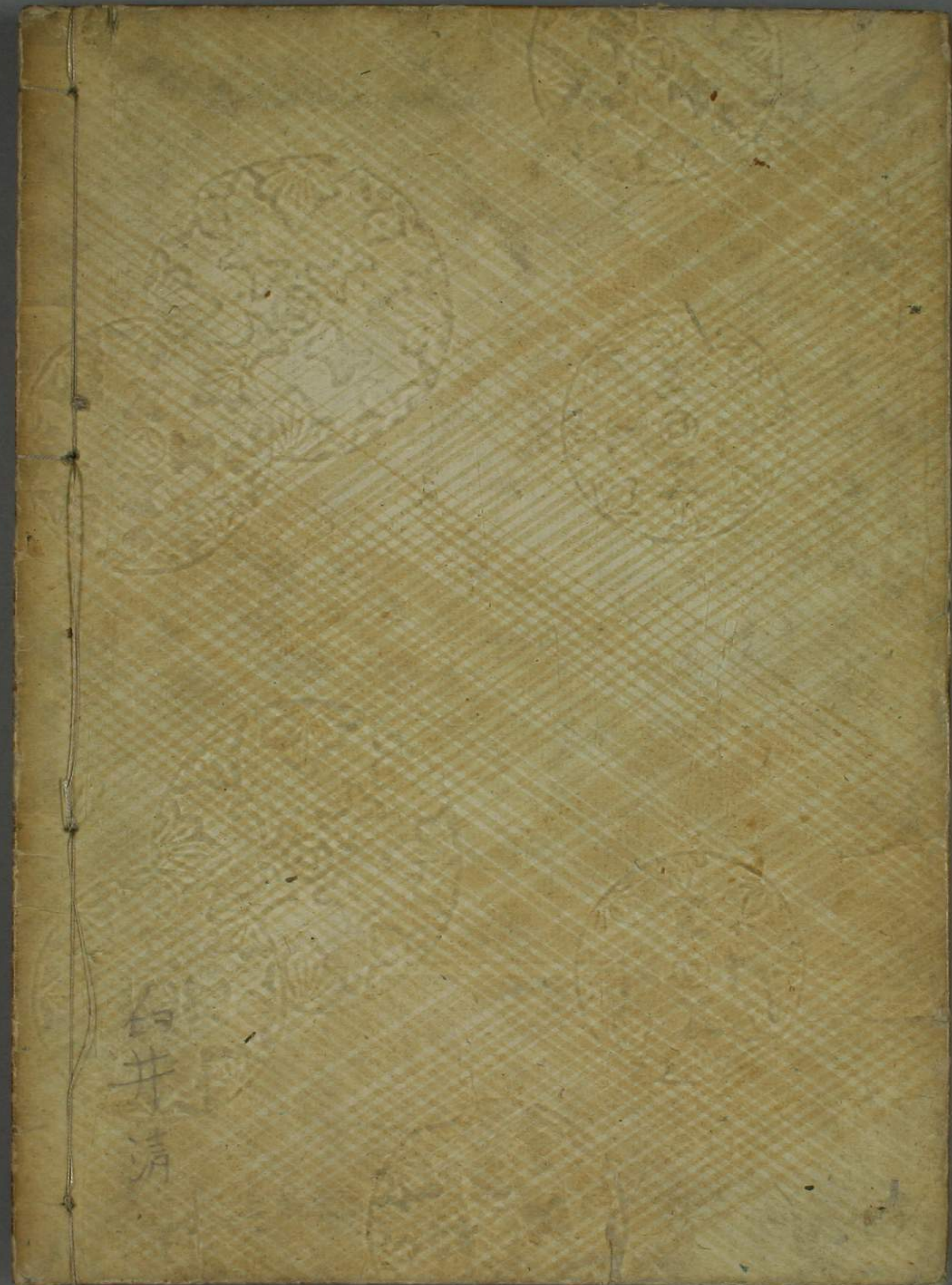
友た房たのた鏡たのた所た三た十た二た

鏡た解た舞たりた十た七た

難た轉た十た八た

湯た津た瓜た擲た山た作た木た三た作たれたるたとたサた三た二た

歷世女裝考卷一終



右井清